



季節の話題

岐阜蝶（ぎふちょう）

昆虫少年達が一度は必ず夢中になる蝶、それが“春の女神”と呼ばれているギフチョウです。名前の由来は、この蝶が岐阜で最初に採集されたことから来ています。東海地方ゆかりの昆虫と言えます。

里山にコバノミツバツツジやヤマザクラが咲く4月上旬～中旬にかけての短期間しか見られず、個体数も比較的少ないことや、地域変異が大きいことも人気の原因になっています。それだけに大量に採集されることも多く、有名な発生地では採集者がギフチョウの飛来を待ち構えている姿をよく眼にします。それとなく話を聞くと、「今日は10匹獲ったけど、先週は30匹も獲れたそうさ。」というようなことが自慢気に聞かれます。20年前に彼らと同じように捕虫網でギフチョウを追いかけて回した私としては、何か寂しい思いがします。



N. Suzuki

ギフチョウの仲間（4種類のみ）は東アジア特産で、日本にいる2種（ギフチョウとヒメギフチョウ）のうちギフチョウは

ギフチョウ（尾張本宮山）日本特産種です。

また、ギフチョウはカンアオイ類（ウマノスズクサ科）しか餌としない頑固者として有名ですが、このカンアオイもまた極端に成長が遅く繁殖速度も遅い頑固者で、古くからの頑固者同士のつきあいと言えましょう。

蝶一種類をとっても、その生活史・植物との絡み合い・栄枯盛衰・生物分布地理などおもしろい見方がいくつでもあります。

みなさんも、ひとつの種に固執した観察をしてみてもいかがですか？（北岡明彦）

協議会ニュース29号 目次

- ・サンシュユとマンサク……………（辻 伸夫）……………表紙
- ・季節の話題 岐阜蝶……………（北岡明彦）……………1
- ・会員紹介 14 ……………（加藤寿芽）……………2
- ・特集 「野生哺乳動物」
 - Ⅰ野生動物の行動を読むウォッチング（大竹 勝）…3
 - Ⅱ雪上アニマルトレッキング…（北岡明彦）……………5
 - Ⅲムササビ観察入門……………（神戸 敦）……………6
- ・自然と環境NOW
 - 「長良川河口堰問題を通して」（鈴木成和）……………7
- ・おたよりコーナー……………（宮本敬之助）……………8
- ・マイ・ウォッチング……………（北岡由美子）……………9
- ・会員広場（野末満江・村上和彦）……………10
- ・支部だより……………11
- ・スタッフ研修会に参加して…（岩崎龍生）……………13
- ・協議会行事報告・会員異動……………14
- ・行事案内……………15

“サンシュユとマンサク”

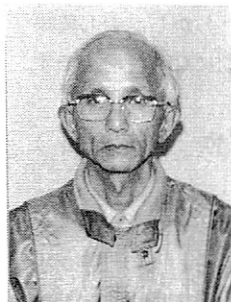
“花の春”が待ち遠しい頃です。冬枯れの林に春の息吹きを探してみましよう。

自然の生きものたちは、すばやく“光の春”を感じ取って、もう活動を始めています。落葉樹の庭や林に鮮やかな黄金花を咲かせているサンシュユやマンサクがそれです。花がまだあまり見られない季節だけに、私たちの心はずみずみます。

さあ、春花季節の始まりです。今年も花をいろいろな角度から観察して、記録を残すことにしましょう。

1990・2・26 辻 伸夫

私 と 自 然 （ 雑 感 ）



近頃なんだか子どもの頃
歌った唱歌、童謡とか民謡
がなつかしく、それに関す
るテープ、本を買った。何
故！とを考えてみても分から
ない。

テープで唱歌、童謡、民
謡を繰り返しくり返し聞いている。よくもあきず
にと家内は笑う。車の中で、家の中で。孫も、ま
たかという顔をしているが、私は根気よく聞い
ている。

「虫の声」

- あれ松虫が鳴いている
ちんちろ ちんちろ ちんちろりん
あれ鈴虫も鳴き出した
りんりんりん りんりんりん
秋の夜長を 鳴き通す
ああ おもしろい 虫の声
- きりぎり きりぎり きりぎりす
がちゃがちゃ がちゃがちゃ くつわ虫
あとから馬おい おいついて
ちょんちょん ちょんちょん すいっちょん
秋の夜長を 鳴き通す
ああ おもしろい 虫の声

—「尋常小学読本唱歌」—

「手のひらを太陽に」

- 1 ぼくらは みんな生きている
生きているから うたうんだ
ぼくらは みんな生きている
生きているから 悲しいんだ
手のひらを太陽に すかしてみれば
まっかに流れる ぼくの血しお
みみずだって おけらだって
あめんぼうだって みんなみんな
生きているんだ ともだちなんだ

加藤寿芽（知多支部代表）

- 2 ぼくらは みんな生きている
生きているから 笑うんだ
ぼくらは みんな生きている
生きているから うれしいんだ
手のひらを太陽に すかしてみれば
まっかに流れる ぼくの血しお
とんぼだって かえるだって
みつばちだって みんなみんな
生きているんだ ともだちなんだ

「三階節」

米山さんから 雲が出た
今に 夕立が降るやら
ピッカラ チャッカラ
ドンガラリンと音がする
ハァ ドンガラリンと音がする
今に 夕立が降るやら
ピッカラ チャッカラ
ドンガラリンと音がする

「牧場の朝」

- 1 ただ一面に 立ちこめた
牧場の朝の 霧の海
ポプラ並木の うっすらと
黒い底から 勇ましく
鐘がなるなる かんかんと
- 2 もう起き出した 小舎小舎の
あたりに高い 人の声
霧に包まれ あちこちに
動く羊の 幾群の
鈴がなるなる りんりんと

歌詞などの意味を考えると、昔懐かしい言葉と
解釈してよいし、自然の様子を表しているとも思
えるし、自然保護の歌ともとれるし！

これも年のせいかも知れないね。

「野生哺乳動物」

野生哺乳動物は、夜行性が多く、日頃その姿を見かけることは少ないと思います。しかし、少し興味を持てば動物たちの生活痕跡等にめぐり会うことができます。今回の特集が観察の一助になれば幸いです。

I 野生動物の行動を読むウォッチング

大竹 勝（会長）

はじめに

日本の野生哺乳動物は、ほとんど夜行性でその姿を見るのが困難です。姿が見られないからそこには哺乳動物が住んでいないとは言えません。動物がそこに生活する以上その痕跡が必ず残されています。その生活痕跡は動物たちから私たちへのメッセージです。それを読み取ることが野生の世界への入り口です。断片的なメッセージからその動物の行動を推測する必要があります。野生動物を知るために欠かせないのが、旺盛な好奇心と推理力です。常に推理を働かせながら、山野を歩くことこれこそ野生動物との接点を求めるために必要なことです。例えば野生動物の研究者にならなくても、一つの痕跡からそこに生活する動物の生活の断片を知ることができれば、自然の持つ大きな広がり接近できるのです。私たちが自然観察の指導をするうえでも参加者共々楽しいひとときを持つことができます。野生動物に接近する方法はいろいろありますが、比較的見つけやすい痕跡について述べてみたいと思います。

足 跡

足跡は中でも有力な手掛かりになります。同じように山を歩いている、その足跡に気がつく人はごくわずかです。自然観察の基本に、見えていても見えないものを確認できるということは重要なことです。足跡が一番目につくのは雪の上であることは誰でも気がつきます。この地方は雪が少なくごくまれにしかその機会はありません。それでは足跡を発見することが困難なのでしょう。か？そうではありません。注意ぶかく観察すればかなりの頻度で見つけることが可能です。たとえ

ば、雨上がりの山道では、ぬかるみが残ります。土の乾き具合や足跡の残り方から、その動物が雨の後に歩いたのか、雨の降っている間に歩いたかを判断できます。歩いた方向やその動物の大きさまで推測できます。足跡はこの他にも川原の湿った砂の上や、池の周りの少し干上がった場所、山が崩れて軟らかな土の露出した場所などさまざまな場所で発見することが可能です。意外な場所で意外な動物の足跡を発見することがあります。

この足跡を効果的に見るために、足跡トラップをしかけてみるのも一つの方法です。キャンプファイヤーなどの灰を使い、ステンレスのざる



キツネの足跡

で灰を山道などの平らなところにまんべんなくふるっておきます。夜から明け方にかけてそこを動物が通れば足跡が残ります。意外に動物たちも人の作った道を利用していることが分かります。

糞

山道を歩いていると、動物の糞に出会うことがあります。この形や大きさから動物の種類が分かります。この糞を水で洗って見るとその動物の食生活をかいま見ることができます。私のリュックサックにはいつもステンレスの茶こしが1個入っています。これに糞を入れて水の中で小枝などでほぐしながら水洗いをする、未消化の残渣が残ります。これを調べてみると1個の糞にさまざまな情報が隠されていることがわかります。



カモシカの糞

動物の骨や毛の多いのは肉食動物の糞で、その中にビニールなどが多いのはキツネです。種や植物繊維、昆虫の破片等が多いのは雑食性の動物

です。昆虫でもゴミムシなど地上性の昆虫が多いのはアナグマで、樹上性の昆虫が多いのはニホンザルです。このような方法を糞分析と呼んで食性を知るための研究方法の一つです。観察会等でもっと利用されて良い方法です。動物の食性から、それに集まる昆虫等から分解者の役割、その地域の生態系へと話題の展開が可能です。

食べ痕

山の植物には多くの痕跡が残されています。葉や小枝を噛み切った跡。幹をかじった跡。果実や種を食べた跡等などです。葉や小枝の切れ方でも動物の種類を判定することが可能です。シカやカモシカはまっすぐですが、ノウサギなどは斜めに刃物で切ったように切れています。食痕の地上よりの高さも目安となりますが、この場合はその地域の降雪量を考慮しなければなりません。雪が多いところでは地上1mのところにノウサギの食痕を発見することも稀ではありません。

木の実の食べ方にもいろいろあります。野外でクルミが2つに割れたものや丸い穴があいたものが見られ



リスの食べたアカマツの実です。リスは歯で境めをかじりきれいに2つに割って食べます。ネズミは丸い穴をあけて食べます。秋にアカマツ林を歩くと、マツボックリの軸だけたくさん落ちているのに出会います。これはリスの食痕で、木の上でマツボックリを取って、付け根の方からていねいにかじりながらマツの実を食べた跡です。同じ様にマツボックリを食べても、ニホンザルの場合はもっと雑で無理やりかみ砕い

たようになっています。モミの木のある林でモミのマツボックリをばらばらにしたものが1か所に集まっていることがあります。これもリスが食事をした場所です。山でドンギリに穴があいているのを見かけますが、小さな丸い穴はゾウムシが出た穴ですが、少し大きくて中身がかじられたものはネズミの食べ跡で、注意ぶかく観察すると門歯の歯形が観察できます。

早春、山でツバキの花が多量に落ちていることがあります。そのまま落ちているのは自然に散った花ですが、壊れた花はニホンザルがツバキの蜜を採食した跡です。ツバキの蕾が多く落ちているときは注意して観察してみると、多くのものにかじり跡が見られます。これはムササビの食痕です。近くに細い木の枝もたくさん落ちていることがあります。手に取って観察してみますと、枝は斜めに切断されていて冬芽がありません。これもムササビの仕業です。

愛知県下の野生哺乳動物

県下の野生哺乳動物は、イノシシ、カモシカ、シカ、ニホンザル、キツネ、タヌキ、アナグマ、テン、イタチ、ノウサギ、ムササビ、リス、アカネズミ、ヒメネズミ、スミスネズミ、ハタネズミ、カヤネズミ、コウベモグラ、ミズラモグラ、ヒミズ、ジネズミ、カワネズミが生息します。この他に三河山間部で生息の可能性があるのが、オコジョ、アズマモグラ、コモグラ、ヒメネズミなどです。

おわりに

ここに書いたことは、野生動物が残したメッセージの一部です。しかし、これらの情報は、注意して観察しないと何の意味もありません。一つ一つの情報の断片を集めて動物の生活を推測するのです。これは、残された証拠から犯人を捜す、シャーロックホームズの世界です。

観察会で比較的小さい点に集中しがちですが、細かい点から全体に広げるために、断片の情報を集めその空間を推理力でつないでみるのも必要なことです。

89年は年末近くになって何度も雪が降り、アニマルトラッキングをするのに好条件でした。

稲武町面ノ木峠のブナ林と瀬戸市海上町での観察実例をお話しましょう。

まずは動物の足跡を見つけることが第一です。森林の真中より、案外道路上や林縁の方がたくさん足跡を見つけられます。人が歩く道を動物達も有効に使っている感じが感じられ、何となく楽しい気がします。

面ノ木峠での11月12日と12月17日の2回の観察会ではテン・キツネ・ノウサギ・リスとヤマドリ合計5種類の足跡を発見しました。雪上を歩きながら、彼らの足跡を少し追いかけることにしました。

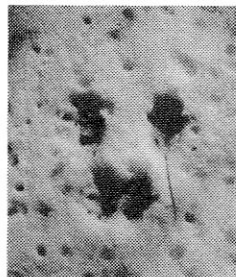
（ウサギ）

まずノウサギは、かなり不規則に跳んだりはねたりしていました。2匹の足跡が交差したり、なぜか足跡が行方不明になったり、本当に活動的です。日当りの良い南向斜面で、糞がコロコロしてたり、黄色い尿の跡を見つけることもできました。

（リス）

両側をスズタケに覆われた尾根の遊歩道に沿って、4個1組で点々と続くかわいらしい足跡を見つけました。4個の足跡は「逆八の字」に並び、5本の指とツメ跡がくっきり残っています。

これがリスの足跡でしたが、リスは樹上生活者で道路を横切る時ぐらいしか地上に降りないだろうという先入観が強くて、しばらくリスだということに気づきませんでした。



上空にはブナやカエデの樹が茂っているのにどうして地上ばかり歩いているのでしょうか？

瀬戸市海上町でも、楽しいウォッチングができました。

まず失敗談をひとつ。少し前に面ノ木峠で道路上的についたキツネの足跡を見ていましたので、人家から離れた林道上の足跡も当然キツネと思いこ

み、足跡の写真をきれいにパチリ。しばらく歩こう、この謎の足跡が何と人の足跡と並行して続くようになりました。うかつにも、これは真正正銘のイヌでした。ガッカリ。

次に大発見をひとつ。林道上にピョンピョン続く、アオジかホオジロと思われる足跡があり、少し離れた所に、ちょっと変わった模様を発見。いろいろ想像をしてもわかりませんでした。やがて右図のようにはっきり



小鳥が飛びたった跡

した跡を発見。鳥が飛びたつ時にはばたいた風切羽根の跡だということに、やっと気がつきました。

このように雪上トラッキングは、動物達の痕跡から、その種類や行動を類推するという、推理小説的な楽しみが、何とも言えません。

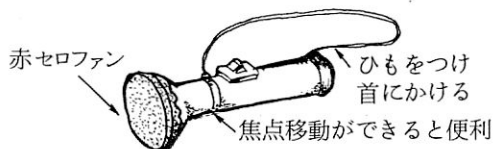
特別な装備は必要ありませんが、ゴム長靴だけは必需品です。面ノ木観察会にズック靴で参加した方は、悲惨な結果となりましたので、要注意！あとは、防寒服・防寒手袋と双眼鏡・カメラがあれば完璧です。



野生動物の観察は、生息場所がなかなか特定できないだけに難しいものです。しかし、ムササビはきちんと手順を踏めば、容易に観察できます。

1. 準備

- 夜で足場が悪いので、動きやすい靴
- 赤いセロファンをはった懐中電灯
- 観察する日の日の入り、日の出の時間を確認



2. ムササビのいそうな森

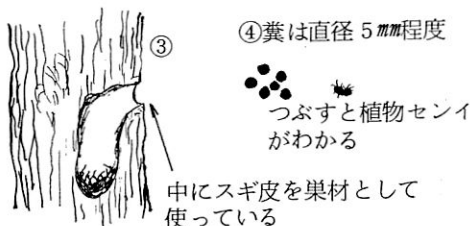
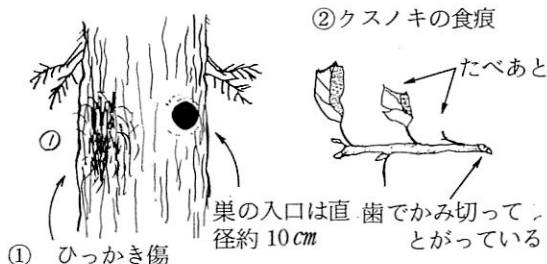
次の条件を満たす所に生息の可能性があり、社寺林が該当します。

- ① 巣を作りやすい大きな木がある。
- ② エサとなる樹木が生育している。
- ③ 滑空のための空間がある。

3. 観察の手順

- (1) 明るいうちに、観察予定の森をひとまわりして、樹木の種類・分布、建物等の景観的特色及び地形を頭にいれます。

併せて、ムササビの生活痕である①スギのひっかき傷、②食痕、③糞、④巣を探します。①～④のいずれかが発見できれば、ムササビが観察できる可能性が十分あります。



- (2) 観察適地(例えば、巣から20m程度の位置)で暗くなるのを待ちます。

- (3) 暗くなり、木肌の模様がはっきり見えなくなる頃(日の入り後20～30分程度)ムササビが巣から顔を出します。

ライトを当てると2つの目がギラッと光ります。光るのは、ムササビもこちらを見ているということです。近い距離で強力なライトだとこちらを見てくれません。また、ライトの明るい焦点部分を避けて周辺部分で照らすようにします。このころ、「ギュルル」とか「ゲーゲー」とか鳴いたりします。

- (4) 顔を出して数分たつと、盛んに身をのりだし外の様子をうかがいます。



突然、巣を出て木の上の方へ登っていきます。そして、滑空。

- (5) 耳をすますと、パラパラと音がします。脱糞中で、糞が木の葉や下草に当る音です。
- (6) さらに滑空して、餌場の森へ行きます。
- (7) 朝方、逆ルートで帰巣します。

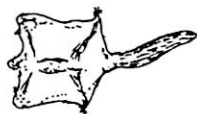
4. 観察のポイント

- ムササビは、草食性の弱い動物。
- 夜行性かつ樹上生活(巣は木のうろ)によって捕食者から身を守る。
- 餌は木の葉が中心で、滑空により安全で早く、よりたくさん確保できる。

5. おわりに

ムササビは、丘陵部の社寺林でも結構すんでおり、初めての人でも観察の手順さえ守れば出会うことができますので、ぜひ試みて下さい。その時は、老婆心ながら、夜のことであり森の管理者に断ってから観察して下さい。

また、協議会では哺乳類の調査をしていますので、結果を神戸までお送りいただければ幸いです。



長良川河口堰問題を通して

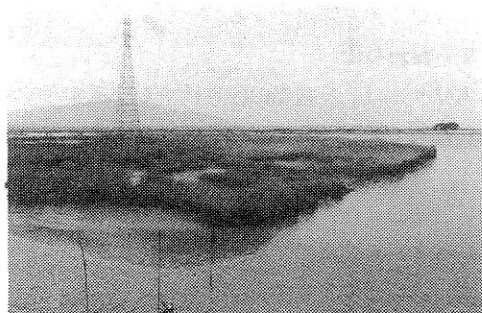
(尾張支部 鈴木成和)

去る2月19日、岐阜市文化センターで「ストップ・ザ・河口堰の集い」(利根川、芦田川河口堰と筑後川大堰の体験を訴える)と題する集会に出掛けて参りました。平日の夕方とあって開催時にはかなりの空席がみられましたが、やがて場内は満員となり、場外のモニターにて話を聞かれる人も多数みられる程の盛況ぶりでした。

今回の集会は、これまで活動して来たそれぞれの団体が、初めて一堂に会して合同で主催する形がとられました。講演では、各地の既存の堰での現状等が報告されたのですが、その中でも特に印象的であったのは、芦田川漁協の組合長によって報告された、広島県福山市の芦田川河口堰についてのものでした。

話によりますと、芦田川は以前は川の両岸をシラスウナギ(ウナギの稚魚)が、アリの行列のようにのぼるのが見られたところで、シジミ採りもよく出来た川であったということでした。それが堰が完了した現在では、食用に出来るような魚貝類は一切採れなくなり、出荷が完全にストップしているのが現状だとのことでした。

また、湛水化により水質が悪化して、夏期にはユスリカ類が大発生し、これが網戸をくぐりぬけて家の中まで侵入し、目も開けられない程になること、そして、堰による水位の上昇のため、民家の下にまで地下水が浸み出していること等も報告されていました。



堰建設現場のすぐ上流部に広がるアシ原
(堰が完成すればこのアシ原も消失する)

この堰には、魚道ぎょどう(階段式魚道)が付けられているのですが、そこではシラスウナギは勿論コイすらも登らないとのことでした。それを示すかのよう、大雨の際に水嵩が増し堰が開けられた場合、激しい流れと共に堰の下へ流された多くの魚は、水嵩が減り堰が閉められるともう再び川へは戻れなくなり、洪水の後には決まって堰の下で多くの死んだ魚が真白になる程みられるとのことでした。今まで実際場で、まともに機能している魚道はひとつもないとよく言われているのですが、特に、河口部で急激な塩分濃度差の起き易い場所では、魚の遡上はなおさら困難ではないでしょうか。



河口干涸は憩いの場所となる

汽水域という場合は、ここを行き来している魚ばかりでなく、様々な数多くの生動の生活が営まれている所です。また、これらの活動を通じて、水質の浄化にも大きな役割を果たしていることが、知られています。このような場が、堰によりほぼ淡水域と塩水域とに仕切られてしまえば、この汽水域の生態系は大きく破壊されてしまうのは当然のことでありましょう。

また、そればかりでなく、現在岐阜市街地から下流部にかけては、生活排水等が多く流れ込んでおり、かなり水質の富栄養化が進んでいるのが現状です。もし、ここが湛水化され水流が停滞されれば、加速度的な水質の悪化が起こり、それによって多くの魚類・水生昆虫・鳥類にいたるまで、大きな影響が当然出てきます。

ところで、長良川河口堰の目的は、治水・利水にあるとは言われています。しかし、建設側の説明はいくら聞いても、その必然性が浮かび上がってこないように感じられます。治山治水といった

言葉がありますが、流域の森林の保全を行って初めて本来の治水ができるのではないのでしょうか。もし、1,500億円もの資金が水源林の保全に役立てられるならば、長い眼でみれば治水にも利水にもかなりの成果が期待できるのではないかと思います。

今現在、各企業では水の再利用等で水を効率的に使用して行く傾向にあります。環境問題が叫ばれる昨今、自然の水循環や自浄能力をできるだけ

損わぬよう行動すべき時でありましょう。

現在、流域に住む人々の間に多くの反対の声があがってきており、これを無視して堰の建設が続いているのは許されないことでしょう。

どうか皆さんも今おかれている長良川の状況を一度お考えになってみて、正しい眼でとらえてみて下さい。そうする事によって、いろんな事実がより明白になってくると思われます。

興味ある方は、一度御連絡下さい。



おたよりコーナー

東京目黒自然教育園の生態学講座を受講して

昭和27年から連年開催されているこの講座を、昨年に引きつづいて2回受講し、感銘深いものがありました。何等かの御参考にもと思い報告します。

本年度で第38回、初日に概論を講述される門司先生以外の方々は、若かりし頃この講座を受講されて生態学の分野に踏みこまれたと夫々冒頭に話される程の、歴史のある講座です——門司先生は第1回以来の講師とか……

本年の講座内容は次のとおりです。

- 第1日 生態学概論 東京大(名) 門司正三
- 第2日 植物の社会 横浜国立 奥田重俊
- 第3日 植物の物質生産 東京水産大 有賀祐勝
- 第4日 植物の生活 北里大 横井洋太
- 第5日 植物群落の遷移 千葉大 大賀宣彦
- 第6日 動物の個体群と群集 野鳥の会 樋口広芳
- 第7日 動物の行動 北里大 奥井一満
- 第8日 土壤微生物の生態 農工大 浜田竜之介
- 第9日 動物の社会 東京大 松本忠夫
- 第10日 生態系 筑波大 三島次郎

日曜日は休講ですので、全部聴講しますと12日間滞京しなければなりません、希望の講座だけでも聴講できます。

受講者の層は、老若男女、老は妙高高原の根津老(指導員Noは確か1桁)から女子大生・大学教授から私のような野次馬まで、地方

西三河支部 宮本敬之助

は北海道から沖縄まで——早く来て前の席をとるのはやはり遠方組です。

受講料は1講座515円、これは値打ちです。申込方法は講座開始第1日の1ヶ月前から電話で申込み順ですが、これがなかなかの電話レース。丸1ヶ月前の午前9時を目指してダイヤルをまわして予約すると、受付番号がもらえ送金すると受講表が送られてきます。(TEL. 03-441-7176)他にも、NACS—Jの「自然保護」誌や平凡社の月刊アニマ等にも掲載されます。

因に、本年は9時から電話にはりついて10時につながり、番号は48番でした。定員は80名です。なお、講座は例年3月の第2土曜から始まるようです。

自然教育園は国立科学博物館の附属施設でE目黒より15分の所ですが、武蔵野の自然が残されている園地で、江戸時代の武蔵野を偲ばせるものがあります。特にこの季節はカタクリ・ニリンソウ等の開花期にあたり、その春への移りかわりを見るのが楽しくて、ラッシュのE電にゆられて早目に通ったものでした。

この講座に興味のおありの方は、御連絡下さい。

カワセミの観察（定光寺にて）

北岡由美子（尾張支部）

88年2月から、定光寺正伝池でカワセミの観察をしています。週1回の定例観察会を行い、月1回カワセミニュースも発行しています。メンバーは尾張支部の山田果与乃さん他数名で、カワセミだけでなく植物観察もします。

観察は3年目の春を迎え、求愛飛翔→求愛給餌→交尾→巣穴作り→餌運び→巣立ちの一連の流れは一応確認できました。どの行動も変化に富んでいて興味深かったのですが、昨年観察できた巣立ち直後のヒナの行動は、初めてのことであり、特に興味深いものでした。その経過は以下のとおりです。

89年6月2日

ヒナへの給餌を観察。最初の

餌は非常に小さい魚であり、しかも10分間にたて続けに3匹運んでいき、ヒナは3羽かも？と推測。

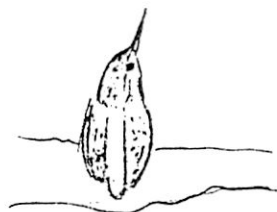
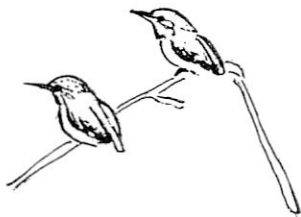
6月12日 巣穴の前に大きなオイカワが落ちており、ヒナを巣立ちさせる為の手段だろうかと話し合う。運んでいく魚もずいぶん大きくなる。

6月17日 1羽巣立ち。何と親が交尾！

6月19日 1羽巣立ち。

6月20日 1羽巣立ち。巣立ちは一匹ずつ。

6月25日 親がヒナを追尾し、翌日ヒナ3羽とも正伝池より姿を消す。



ヒナの形態は、定説通り、足はこげ茶色・両わき腹はくすんだブルー・嘴は短か目・尾は短く尻切れトンボ・背のコバルトブルーは親と同様等々でしたが、その行動は予想外に結構複雑です。しかも、その行動は、まるでイヌやネコなど動物一般の子供の行動と同様で、私達を楽しませてくれました。

3匹の巣立ちヒナとも溪流のうす暗いところからあまり離れず、周囲の林から出たり入ったりしていました。時々2羽が近づいては嘴でつつきあったり、追尾行動のまねごとのような仕草をしたり、1羽が近よると反射的に餌がもらえると思う

のかもう1羽が大きく口をあけたりしました。おもしろい行動としてはツクバネガシの葉を魚と間違えて？



獲り、一生懸命口嘴で木の枝にたたきつけたりしていましたが、これは遊びの一種なのでしょう。

餌を獲る時も3羽一斉に川に挑み込んでカワゲラ等の水生昆虫らしきものを獲り、小さな嘴で一人前に木に打ちつけて食べていました。

魚は観察中一度も獲れませんでした。親が時々魚をやっていたようでした。

ヒナの体の大きさは、生まれた順か大・中・小で、大きな個体は6月の末には池に出て魚を獲っていました。しかし、ヒナを観察できたのはたった10日間ほどで、あっという間の事でした。

いろいろな場所でヒナの行動の比較等ができたより興味深いのでは？と思われました。この年の2回目の繁殖は7～8月に行なわれ、やはり3羽が巣立ちました。8月12日には4～5羽のカワセミが正伝池を群れ飛んでいるという状態となりました。

このように、観察する度に異なった様子がみられ、全く興味が尽きません。今年の春のカワセミは私達に何を教えてくれるでしょう。

皆さんの地域のカワセミ情報を、お知らせ下さい。



カワセミ幼鳥

会 員 広 場 (第1回)



ミズバショウと私

鳥山けい子(東三河支部)

毎年5月になると、ミズバショウを求めて無性に旅をしたくなる。十数年前の7月、ロマンチックな詩に誘われて尾瀬に行った。ミズバショウの花は、すでに終り、高さ1m程の大きな葉だけが残っていた。一面にニッコウキスゲが咲き薔ヶ岳の眺望とマッチして、すばらしい風景でした。

1日目は長蔵小屋に宿泊する。週末なのに同室者は他に3人程でゆったりと体を休めることができた。宿の主人に聞くと明日は超満員とのこと。

翌日、三条の滝を見て富士見小屋へ向かう。途中アヤメ平へ行ったら「ビックリ」。湿原が無惨にも荒れ果てているではないか。自然を愛するつもりの登山者や、観光客の足の裏(私自身を含めて)が、自然を虐めつけているのだ。湿原のような弱い環境は、一度破壊されると、容易に回復しないと言われているが、目の当りにして実感した。

尾瀬のミズバショウの花を見ることが出来なかったことが残念で、それ以後ミズバショウを求めて、郡上八幡の久保沼の巨大ミズバショウ。

また、ブナ原生林の中に80万株も有ると言われる長野県鬼無里村の奥裾花自然園に群生するミズバショウに出会いに行く。

あれから、鬼無里も数年たっていますから今はどうなっているだろうか。観光バスでドット人が繰り出して、湿原に変化が出始めているのではないだろうか。

ミズバショウは、静かに鑑賞したいものです。



奥裾花自然園のミズバショウ群落

オースチン彗星を見よう!

村上和彦(奥三河支部)

オースチン彗星の観察に最も適しているのは、4月21日から5月2日頃の午前1時頃から午前2時30分頃です。北東の空、地平線上10度位の位置になります。

観察場所として、鳳来寺山の山頂はどうかと、先日有料道路の入口に18時30分に到着したが、18時で通行止め。やむなく宇利峠に車を走らせる。ここは真空方向(3月は西空に見える)に樹木が繁り広がりが少なく、開けている所は、街の明りで星が見える状態ではなく諦めて帰りました。

帰途は、東の空ですから良い場所を見つけ直さなくてはなりませんが、ハレー彗星を観察した場所に再び行こうと思っています。

皆さんも東の空が開いている所がありましたらぜひ写真に撮って見ましょう。オースチン彗星が見える場所さえ確保できれば、専用機材が無くても、一眼レフのカメラさえ有れば彗星を撮影することができます。

フィルムはISO 1600 または 3200、三脚、レリーズを用意して下さい。シャッターは、B(バルブ)で20秒から50秒(ISO 1600)で10秒単位で撮りましょう。双眼鏡で位置を決めてから撮影するのが一番良いのですが、なくても星座を確認して、その日の予想位置にカメラをセットすれば目に見えなくても彗星は撮れます。

例えば、4月21日は、アンドロメダ座のペーター星のそばにいます。彗星は一等星位の明るさになると予見されていますから、目で見えると思いますのでチャレンジして見て下さい。

オースチン彗星は、1989年12月にニュージーランドのオースチン氏により発見された、まだ多くの謎を秘めた彗星です。ハレー彗星の倍以上の光量を有し肉眼でも十分に観察することができます。次回は何年後に接近するのかまだ解明されていないとのことです。

支部だより



名古屋支部

3月14日(水) 支部例会 県中小企業センター

3月の例会は「愛知県産のミドリシジミ類について」名古屋支部会員の魚住泰弘氏の講演とスライドでした。

日本産ミドリシジミ類は24種、そのうち愛知県では17種が確認されているそうです。隣の三重県では18種、静岡県では20種、岐阜県と長野県では21種が確認されているそうです。昆虫類の豊かさが自然の豊かさを表していると考え、少し寂しい気がします。

ミドリシジミ類はゼフィルスと呼ばれ、その一部(アカシジミなど)は平地の雑木林の林縁でもみることができます。

それぞれ、自分のフィールドでその素晴らしい姿を見てください。(吉田義人)

知多支部

1月28日(日) 支部総会

新会員も多く17名の参加を得て活気ある総会となった。今総会の目玉は、支部のブロック化。6か所に分け効率化を図った。

行事日程は相変わらず木目細かく、担当割当は謙譲美しく豪華な破り子を突きながら決まった。

3月25日(日) 観察会下見

6名で磯の生物観察会の下見と事前研究。磯の生物は多彩で、ウニの放射された精子も観察。近くの神社にて香りのよいユーカリの花、アリジゴクも観察でき、予想外の収穫となった。

(東海市内観察メモ)

1月2日防鳥網でもがくツグミを放出。特にツグミがよくかかるようだ。

1月19日カワセミのテリトリー争い初見。

3月19日ウグイスの初音及び魚を狙うイタチ、更にヌートリア初見し興奮する。(菊池今朝和)

尾張支部

2月11日(日) 支部観察会 立田村木曾川堤

「雨の日でも自然観察はできる」というのが私達のモットーですが、やはり参加者の数は……。遅れて到着した人を含め12名と寂しい観察会でしたが、雨でもこれだけ集まるのはスゴイとも言えます。

本日の主役のはずのカモ達は、すべてもやの中。グエーッ・グエッ・グエッ(マガモ)やピリッ・ピリッ(コガモ)という声だけが響いてきます。

しかし、やはりモットーは生きていました。木曾川堤防内のヨシ原でチーという鋭く細い声、平井君が「あっ、ツリスガラノ」とすぐに反応したのは、さす



珍鳥ツリスガラ

がにベテランウォッチャー。尾張支部の実力です。動きが速くてじっくり見ることはできませんでしたが、ツリスガラの群れは愛知県では珍しい鳥です。

船付場に溜った泥中に群生するタコノアシ(ユキノシタ科の多年草で、愛知県では極めて稀)のおもしろい姿も、みんなの注目を浴びました。

たまには、雨の日の自然観察も良いものです。

(北岡明彦)

3月11日(日) 支部観察会 瀬戸市定光寺

暖かすぎるくらいの好天に恵まれた早春の一日を自然観察しながらのハイキングでした。

落葉樹が葉をつける前に花を咲かせ実を結ぶというショウジョウバカマの群生。ひっそりと落葉の下に開く肉厚なスズカカンアオイの花、その場



スズカカンアオイ



ショウジョウバカマ

にしゃがみこんでルーペでのぞいてみた時のあの感動。ラフレシア・アーノルディに似た風格と色調を備えて、忘れる事のできない早春の花の一つです。

落葉樹林の特にコナラの芽吹きは芽鱗を押しつけて、動き始めたピンクの新芽が白銀色のうぶ毛におおわれて光り輝く様子がとてもかわいく、印象的でした。

田んぼの中では今朝生まれたばかりと思われるオタマジャクシの群れや、目をさましたばかりのキタテハやコツバメ、野鳥のアオジ・ホオジロ・ベニマシコなどが見られました。

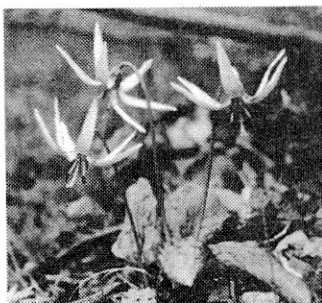
ウグイスの声が心地よく響き渡る静かな里山の最後は、神明社におけるムササビの痕跡探し。ヒノキ冬芽の食害痕、スギ樹皮のシメ跡、糞などが発見でき、時を忘れる一日となりました。

(山田果与乃)

西 三 河 支 部

3月25日(日) 一般公募観察会 足助町飯盛山
銀座の雑踏並ににぎわう飯盛山カタクリ自生地
で観察会を行いました。

指導員9名、
参加者は約40名
あり、まずカタ
クリとウバユリ
の生活史で1時
間、次いでスケ
ッチ等で1時間
を過ごしました。



カタクリを始
御存知カタクリ
めキクザキイチリンソウ・ヒトリシズカ・ヤマル
リソウなどの花が満開でした。

解散後に香積寺の下で野点を行いました。快
晴の下気持ちの良い日でした。(宮本敬之助)

東 三 河 支 部

1月14日(日) 平成2年度支部総会

於 西武百貨店ホール。会員21名の参加のもと
支部の運営について熱心な討議が行われました。

そのうち事業計画の概要をお知らせいたします。
他支部の方で興味のある方はご参加下さい。

自然観察会の部では、4月29日 県委託で豊橋
市岩屋観音で行い、6月3日 全県一斉環境週間
の一環として豊川市財賀寺で、7月22日には田原
町白谷海岸で、10月21日 豊橋市金色島で行うこ
とを決めました。また、会員研修の部として、5
月上旬鳳来寺山を歩く会、8月4～5日 佐久島
の一泊旅行、9月8日 豊川三上橋下流にて、月
の観察と鳴く虫を聞きながら芋煮会を計画しまし
た。

時間の経過も忘れて熱心な討議の後は2次会、
3次会へと繰出すエネルギーが東三河支部の原動
力だと信じています。その反面、反省も忘れず幾
多の意見も聞かれたところです。時あたかもこの
稿を書いているとき、協議会ニュース28号の岩崎
龍生さんのおたよりコーナーの記事と同じ意見も
出ました。私も同感であります。私の経験では、
当支部は観察会の都度、急場しのぎの救急箱を持
参していますが、県委託の観察会のたびに紛失な
いしは置場所が変わっているということや、薬品に
ついての評価があったとのかを耳にしたことが
あります。支部には支部の独自性もあります。リ
ーダーもサブリーダーも真剣そのもので事に当っ
ています。その気持を理解してほしいものであり
ます。(武田孝夫)

奥 三 河 支 部

1月28日(日) 支部総会

出席会員5名。支部総会で決められた平成2年
度の主な行事は次のとおり。

1. 県委託自然観察会 7月29日(日)に鳳来町県民の
森周辺で行う。(下見は7月8日)
2. 支部主催自然観察会 10月14日(日)に新城市の吉
祥山自然環境保全地域で行う。
3. その他 会員の役割分担は2年任期半ばであり、
引き続きお願いする。

支部会員の積極的な参加が望まれる。

(石川静雄)

自然観察指導員講習会スタッフ養成研修会

岩崎龍生（尾張支部）

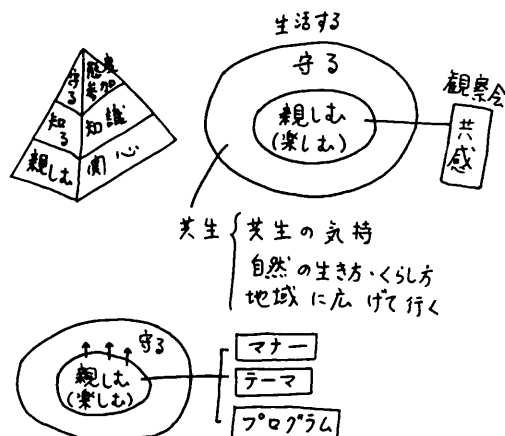
自然保護協会の主催で、講習会の講師とか指導員をコーディネートしていくスタッフを養成するための研修会が、昨年11月17～19日に横浜市こどもの国で行われました。

この研修会のディスカッションの中で出された問題とか意見、研修会に参加して考えたことなどをまとめてみます。

1. 「親しむ－知る－守る」について

自然保護教育の段階として、従来「親しむ—知る—守る」という整理の仕方がなされてきましたが、これに対していくつかの問題が提起されました。

- 実際の観察会では、この3段階に分けて考えられない。
- 分けて考えなくてもよい。実際の活動に枠をはめているものではなく、活動を広げていくためのマニュアルとして必要だろう。指導員の頭の中で整理されることである。（協会）
- 「守る」とは具体的にどういうことか。
- 「守る」ことへのアクセスには、どのような方法があるか。
- フィールドマナー、観察のテーマ、まとめの話の工夫などが入口である。（協会）



- 親しみ(楽しみ)ながら「守る」情操教育をしていく。
 - 話術として大切なことは、
 - ①わかりやすく ②感動させる
 - ③共感性を持つ ④おもしろく
- 「100匹のサル」……サルがいもを洗った。100番目のサルが食べたなら、他のサルも一斉に食べ出した。それが指導員である。

2. なぜ「観察会」をするのか

- 「観察会」を広げるために、指導方法についてのマニュアルが欲しい。
- 登録申請書にある「指導できる分野に○」というのは負担が大きい。
- 環境教育の名のもとにアウトドア、スポーツ指向の活動が出てきた。
- 自然とのつながりを考え、どのように生きていくのかを探るのが環境教育の目的のほうである。アウトドア、スポーツ派や観光業者とは基本的に違うのではないか。
- 環境教育のプログラムを研究し実践していく中で、アウトドア、スポーツ指向の人達をひき入れていくことは大切である。いろいろな活動にも注意を向け、観察会を常に見直すことも必要である。（協会）
- 地方と都会での観察会の違いがある。今の観察会は都会的であり、地方では受け入れられないと思われる。
- その地域のニーズに合ったテーマの観察会を、それぞれの地域ごとのやり方を工夫しながら行うことも大切で、効果を焦り過ぎないことも必要である。（協会）
- 都会の人達が地方に出かけてきて起きる問題もある。
- 都会の人と地元の人とのギャップをうめる役割を指導員が果たすのが望ましい。「御前崎のアカウミガメ保護の例」（協会）

3. 宿題となったこと

- 観察会の理論化とマニュアル化が必要である。
- 指導員としては事例集（個性重視）とかマニュアル集（共有できる骨組み）を作っていくたい。

4. 私が考えたこと

全国から集まった様々な人の指導の仕方を見たり意見を聞いたりして、観察会のやり方や考え方の多様さを感じるとともに、またそれぞれの指導員が悩み、迷いながら観察会を行っていることも分かりました。

以下、わが協議会の活動のあり方などについて思ったことをまとめてみますと、

- 指導員としての活動は教え導くことであり、自分だけが楽しむような活動であってはいけな

いこと。

- 観察会は知識の切り売りではなく、自然の大切さを伝えるのが基本であることを忘れてはいけないこと。
- そのためには、どのような指導方法がよいか考え、研修する場をつくること。

（参考）当日の内容

- ・レクチャー① 保護運動と観察会活動の関係
② スタッフの基本的態度と資質
③ 講習会での強調整と指導方法
④ 指導員の研修、関係団体の協調
⑤ 自然保護教育の将来像作り
- ・ディスカッション（各種）
- ・実習：感覚トレーニング、マクロに見る（森）
テーマひろい

協議会行事報告

理事会 2月4日（岡崎勤労福祉会館）

○経理規程の変更

科目に「支部配分金」を設けました。

○総会提出議案

総会に提出する5つの議案について検討。

○10周年記念大会

内容についてなかなか結論が出ず、3月の運営委員会で再検討することになりました。

（出席者 15名）

総会 3月4日（第一生命ビル）

○総会の議案及び結果

- | | | |
|------|-----------|------|
| 1号議案 | 平成元年度事業実績 | 原案承認 |
| 2号議案 | 平成元年度収支決算 | 原案承認 |
| 3号議案 | 平成2年度事業計画 | 原案承認 |
| 4号議案 | 平成2年度収支予算 | 原案承認 |
| 5号議案 | 役員の選出 | |

会長：大竹 勝

副会長：竹内哲也、中西 正

監事：水島富人、松林幸雄

○講演等

①桶ヶ谷沼の自然を考える会の活動について

②ブナ科樹木分布調査・哺乳類分布調査の結果等の経過報告

（出席者 43名）

運営委員会 3月17日（中社会教育センター）

○協議会10周年記念事業

講演を河合雅雄先生にお願いすることなどを検討しました。最終的には、浅井聡司さんに実行委員長を依頼し、この日の意見を中心にして進めることになりました。

○運営委員会の役割分担

（出席者 12名）

会 員 異 動

◎加入

加藤貞徳（尾張支部）

◎脱退

名和 明、見田光江（名古屋支部）

行 事 案 内

5.9 知多支部 室内例会 阿久比中央公民館 18:00 集合
5.13 名古屋支部 隔月観察会 針名神社駐車場 9:30 集合（午前中） （針名神社は地下鉄平針駅から徒歩15分）
5.13 尾張支部 月例観察会〔猿投山〕 雲興寺駐車場 9:00 集合
5.16 名古屋支部等 月例会「水生生物」 名古屋市教育館 18:30（栄交差点北）
5.27 知多支部 自然観察会〔小野浦〕 美浜少年自然の家 9:30
6.3 全県一斉自然観察会 5ヶ所 善師野（犬山市） 小幡緑地（守山区） 任坊山（半田市） 洲原池等（刈谷市） 財賀寺（豊川市）
6.8 知多支部 室内例会 阿久比中央公民館 18:00 集合
6.10 協議会 面ノ木峠自然観察会 全県一斉観察会 10:00 集合（駐車場）
6.10 尾張支部 月例観察会〔定光寺〕 JR中央線定光寺駅 9:00 集合
6.18 名古屋支部等 月例会 名古屋市教育館 18:30（栄交差点北）
6.30～7.1 協議会昆虫観察研修会 くらがり溪谷（05617-3-5674 佐藤迄）
7.6 知多支部 室内例会 阿久比中央公民館 18:00 集合

7.8 名古屋支部 隔月観察会 針名神社駐車場 9:30 集合（午前中）
7.8 尾張支部 月例観察会〔善師野〕 名鉄広見線善師野駅 9:00 集合
7.8 知多支部 豊橋自然史博物館見学 美浜少年自然の家 9:30
7.8 奥三河支部 自然観察会下見 榎原川 三河榎原駅集合 10:00
7.18 名古屋支部等 月例会 場所 未定 18:30～
7.22 東三河支部 自然観察会 白谷海岸（田原町）
7.29 知多支部 川の生物研修会 美浜少年自然の家 9:30
7.29 奥三河支部 自然観察会〔榎原川〕 三河榎原駅 10:00 一県委託一

【編集後記】

今号は、野生哺乳動物について特集しました。日頃あまり見かけることができないのが野生動物ですが、ムササビは、手順さえきちんと踏めば身近かな社寺林でも観察することができます。これから夏に向かい夜も暖かくなります。星空やホタル、そして野生動物の観察に出かけてみませんか。新米編集子のため発行が遅れてしまい申し訳ありません。（中島）

編集事務局：豊橋市西口町字西ノ口46-65
中島 芳彦（0532）62-5053